

## ハッカの匂いがした

オリガ・ジェチュック(女・19歳)

母が医者のところから帰ってきて、私にすべてを話した。論理的に言えば私たちはそこで泣くという場面だったろう。「ママ！なぜ私が。どうして」と。だが、私の代わりに母がそのことをしてくれたのだ。「オリガ！何でお前が。何でお前が死ななくっちゃいけないの」私はただ唇を結んだまま、だまって途方にくれるだけだった。どうしていか分からなかった。私はまだ一度だって死んだことがないのだから。

どことなく胸がひりひり痛んだ。私はどうしても恐ろしい知らせを理解することも信じることもできず、精神状態が不安定のなかで、何度もつぶやいた。「これは何かの間違いだわ。こんなことがある訳がない。私は死なない。こんな若さで死ぬなんてことはないわ！」と。

しかし、見えないハンマーが、重たいばかげた言葉を吐き出させた。「ガンだ。あと二年。いや一か月。残った時間は……」と。いままで私は、「残り」時間がどのくらいか、などと考えたことはなかった。

私は小さいころのことをよく覚えている。毎朝、母は私を幼稚園に連れていってくれた。いつも寒かった。母はいつも古ぼけた秋用のコートを着ていて、寒さに震えているように見えたので、私は母が寒くないよう風をさえぎるようにくっついて歩いた。私と母は二人で生活していた。父は一緒に住んではおらず、祭日にだけやってきた。いつもキャラメル三個がお土産だった。父は正確さと一貫性が好きで、数字の三も好きだった。今、父には三人の息子がいる。もうキャラメルを持ってくることはない。

幼稚園では、私は活発で、明るい女の子だった。遊びながら私は、一緒のグループの男の子全員とキスしたりしていた。これは「いけない」行為だった。もちろん良いことではない。ある日、母は早めに私を迎えにきた。私は着替えをしていて、女の子たちが走ってくるのが見えた。彼女たちは「オリガちゃん、逃げて。コースチャがキスしに来るわよ」と叫んだ。恥ずかしさで、私は穴にでも入りたい気持ちになった。「どういうことなの」と母は青ざめた顔で静かに私に質問した。私はだまってしまった。



私の幼年期はおもしろいものだった。少女期はというと奇妙だった。私は友だちのお兄さんであるアルトゥールを好きになってしまった。彼はやせぎみで背が高かった。私には世界でもっとも美しい男に見えた。神様、私はどんなにか彼を好きだったことでしょう。夜空の星々に、数えきれない彼の笑顔が見えた。彼から電話があれば、すぐさまどこへでも飛んで行くつもりだった。もちろん、彼が電話などするはずがない。彼は私が恋い焦がれているなんてなんにも知らないのだから。そして、とうとう彼が美しくて華やかなファッションモデルの人と結婚するというニュースが飛び込んできた。彼は幸せだという話を聞いた。その時、私はまだ子どもで、目立たなく、美しくもなかった。私は泣きじゃくった。ほほを冷たい窓ガラスに押しつけ、夜空の星をながめようとした。でも空は雨雲が覆っていた。

世間知らずの子どもは大人に恋い焦がれる。それはおかしいことだろうか。私は気を取り直してすべてを忘れ、いたたまれない失恋の痛みを胸の奥底で堪え忍んだ。日常生活に戻った私は、学校の授業に出るようになった。あまり勉強がよくできる方ではなかった私は、何日もかかって宿題を機械的に無理に頭に詰め込まなければならなかった。

休みになると母と一緒に、ゴメリに住む祖母のところへでかけた。そこで私の悲劇が始まった。その日、空気にハッカの匂いがした。頭がくらくらするような太陽の日差しが襲ってきて、鳥はまるで正気を失ったかのように鳴いていた。予期しない幸せに、なぜだか突然私は泣きたくなった。私は一日中外にいて、太陽にあたった。一週間後にはじめて、原発が爆発したことを知った。

そのあとには、恐怖、パニック、奔走そして涙があるだけだった。ゴメリから脱出するためのチケットがなかなか手に入らなかった。鉄道にもバスにも、泣きながら頼んだが、だめだった。誰も我々のためにチケットをとってくれる人はいなかった。そのとき、私は自分の肉体の中で何が起きているかを知らなかった。つまり、セシウムが骨に蓄積し、筋肉が被曝したということ。何年も経ってから、医者へ行ってきた母に、私は末期のガンであると聞いたのだ。

どうすればいいのか。私はそれほど頭がいい方ではない。死とはすばらしいことであると証明するような、何か美しい哲学を考えつくことはできない。そして、私は神も信じない。

教会に行ったときのことを思い出す。そこは薄暗く、香と汗の匂いが充満していた。よくとおるテノールの声がひびきわたる。群衆はなんども十字を切り、何かをぶつぶつ言っている。私のとなりのうつろな目をした女性は、調子のはずれた声でお祈りしている。「神様、お慈悲を。カミ・サーマ・オ・ジヒ・ヲ」子どもたちは、どういう願いがあるのか分からないが、特徴のある発音で奴隷の早口言葉を繰り返していた。私はいたたまれなくなり、出口に突進した。

人は、将来への幸福の夢で、現在をなぐさめるために神を考え出した。私は強い。信じないから、なぐさめはいらない。もし神がいるのなら、チェルノブイリの悲劇は起こらなかつたはずだ。

入院患者用の服を着た幽霊のように青白く、目の下に恐ろしい斑点ができた女の子が、細

い指で強く私の手を握り締めながら話した。「おかしいでしょう？」と彼女は言った。彼女は私に何回となく、自分の生い立ちを話すのだった。しかし、私はなぜか笑うことができなかった。彼女の目は燃えているようだった。このオーリャは白血病で、あと一か月の命と宣告されていた。これは全くおかしいことではない。彼女の笑みは私の胸を痛めつけ、私はどなりたくなった。「なんで笑っているの。ばかじゃない。死ぬということは、永遠の別れなのよ」と。私の考えに応じるように、彼女は笑うのをやめて窓のほうを向き、ゆっくりとこう言った。「死ぬということはもちろん怖いことよ。私のことを書いて。お願い。父がそれを読んで、私のことを知るわ。父は一度もここに来たことがないの」彼女は手のひらで、乾いた目をこすった。

チェルノブイリが語られるとき、私はなぜか巨大な原発、石棺、黒鉛棒の山を連想する事もなければ釘付けされた家、野生化した犬、死と腐敗の匂いのする汚染地区の姿が現れてくることもない。私はただ、死んでいくオーリャを見つめているだけだ。彼女はまるで四六時中詫びているようだった。彼女は死ぬことと、そして、生きてきたことの寛大な処置を乞うのだった。

オーリャはお母さんを愛していた。オーリャは生命を愛していた。

かわいそうなオーリャ。どうしたら、放射能が充満し、神さえも見放してしまったこの世に生きることが好きになれるの。人間の愚かしさに呪いあれ。チェルノブイリに呪いあれ！